
❖ セ ミ ナ ー ❖

研究セミナー

僧院とは何か
—ミャンマー都市部を事例として—

2018 年 9 月 21 日 (金) 15 : 00 ~ 18 : 00

龍谷大学大宮学舎 西翼 2 階大会議室



会場の様子

(龍谷大学大宮学舎 西翼 2 階大会議室)

❖ セ ミ ナ ー の 概 要 ❖

2018 年 9 月 21 日 (金)、藏本龍介氏 (東京大学東洋文化研究所准教授) による講演「僧院とは何か—現代ミャンマーを事例として—」が開催された。藏本氏は「僧院」を言説・ヒト・モノの絡み合いの中で形成・変容していく一つの制度として捉える制度論的アプローチから研究を行っている。また、地域・仏教の種類・学問分野を超えた共同研究はいかにして可能かについて探っている。

藏本氏は、仏教という歴史的な文脈の中で形成されてきた「僧院」が各地・各時代において、どのように変容してきたかを明らかにすることは、仏教史、延いては仏教世界を深く理解するための重要な手がかりとなると述べる。しかし「僧院」の定義は、実は曖昧で、教義 (律)

が規定しているのは「サンガ」であり「僧院」ではないという。「サンガ」は、例えば「界によって区切られ、律に則って運営される自治的集団（最低 4 人以上）」（『上座仏教辞典』2016 年）などと定義されている。藏本氏によると、このような「サンガ」は遅くとも紀元前 1 世紀には、定期収入を得、財産を管理・運用するための組織へと変わっていったという。

「僧院」の定義は曖昧だが、ミャンマーでは国家法により、すべての出家者は中央あるいは地方のどこかの「僧院」に属するというようになっており、それは、「僧院」を出家者集団として実体化している。また、村の「僧院」、町の「僧院」、森の「僧院」など、立地によってその事業内容（例えば、町の「僧院」は教学のため、森の「僧院」は瞑想のためなど）も様々である。「僧院」の構成員の入れ替わりは激しい。仏教試験制度は、かつては師弟関係を重視していたが、今では試験対策テキストの暗記が重視されており、藏本氏は、これも出家者の流動化の要因の一つかもしれないと指摘する。つまり、師匠から律の解釈・実践方法を「受け継ぐ」という形態が少なくなってきたということは、出家者は、法統を超えて自由に移動するということである。これは、ゆくゆくは宗派の解体を促すことにもつながるものである。

植民地期以降、ミャンマーでは、「僧院」の在家組織化が進んだという。藏本氏は、1986 年に設立された T 寺院を事例に、在家仏教徒組織が主導して「僧院」経営を管理する在り方について説明を行った。現在「僧院」における掃除や調理、農作業などにおいても在家者は非常に大きなウェイトを占めており、その存在を欠くことはできない。

藏本氏は、「僧院」とパゴダは、空間的にも機能的にも分離していることを指摘する。端的に言えば「僧院」は出家者の修行空間であり、パゴダは在家者の信仰空間ということである。そして、藏本氏は、両者を構成要素に分解した上で、それらを連続的に捉え直すことが今後重要であることを示唆した。



藏本龍介氏

（東京大学東洋文化研究所准教授）

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員 唐澤太輔